

はじまりの哲学 アルチュセールとラカン 要約

伊吹浩一

アルチュセールは「はじまり」にこだわった。アルチュセールの理論活動の軌跡を振り返ると、むしろアルチュセールには「はじまり」しかないとも言える。本稿は、こうした「はじまり」をめぐる、アルチュセールの思索と実践の軌跡を様々な角度から検討していくことを目的にする。

アルチュセールの理論活動は一定の困難にみまわれる中で開始された。困難に直面する中、精神分析はアルチュセールの理論活動の「はじまり」の駆動力となり、その後のアルチュセールの理論活動全体を通じて大きな参照軸として据えられ、着想の源泉となっていたが、そこにおけるラカンからの影響は特筆に値する。それは同時に、精神分析は臨床のために開発されたものではあっても、他の領域でも大きな力を発揮する、驚異的に射程の広い理論であることを証している。しかし、アルチュセールの理論はその「はじまり」を示すことしかなかった。そこからの前進はなされることがなかった。それゆえ、本稿の目的の一つはアルチュセールが開いた端緒から、それを引き継ぎ、さらなる展開へと歩みを進めることである。とりわけアルチュセールが提起し、解明し切れなかったイデオロギーに関する問題を再度精神分析理論に接合し、徹底的に究明する企てを敢行する。

第一章では、言うまでもなく、理論活動は先行するテキストの批判検討を通して行われるが、そのとき自明すぎるあまり見すごされてしまう「読む」という行為をめぐる考察である。アルチュセールはこの「読む」という行為にこだわった。なぜなら、ここに定位しないかぎり、真の「はじまり」はないからだ。そのとき模範となったのがラカンである。ここにアルチュセールとラカン、マルクス主義と精神分析との出会いが実現する。アルチュセールは、精神分析の力を借りて、みずからがおかれている困難な状況を突破する「はじまり」の契機をつかんだのである。

第二章は、アルチュセールのイデオロギー論についての考察である。アルチュセールは独自のイデオロギー論を展開することでマルクス主義の地平に金字塔を打ち立て、その後多くの思想家に影響を与えることになった。とりわけ「イデオロギーは物質的な存在を持つ」というテーゼの中で示された、精神に対する身体的行為の優位性はこれまでのわれわれの心身観を根本から覆すものになった。イデオロギーは身体的な反復行為によって主体に宿る、或るイデオロギーを信じられなくとも、信じているふりをして、ひたすらイデオロギーに沿った行為を繰り返せば、いつの間にかそのイデオロギーを信じられるようになる。たしかにそのようなことは現実には起こり得る。事実アルチュセールの言っていることが正しいことを示しているが、しかしなぜそのようなことが起こるのか。これを解明するために、

アルチュセールがその「はじまり」しか示さなかったイデオロギー論と精神分析理論との接合を再度行い、さらなる前進を試みる。アルチュセールのイデオロギー論は、いかに主体が誕生するのかを論じたもの、まさに主体の「はじまり」を考察するものであったと言える。それゆえ、この章での試みは、主体に関する「はじまりの哲学」をさらに深化させることになるだろう。

第三章は、前章で身体-行為における行為の問題について考察したことを受けて、身体の問題へと重心を移す。前章で行為のシニフィアン化によってイデオロギーが主体に宿ることが示されるが、しかしなぜ精神ではなく身体を入口にするのか、快感や苦痛を覚えるこの生身の身体でなければならない必然性はどこから来るのか、これを解明することである。これを進めるために再び精神分析理論に依拠し、さらにその深部へと入り込む。これは同時に、アルチュセールのイデオロギー論の行き詰り、つまり彼のイデオロギー論は人々を現状に縛りつけるイデオロギーの強靱さばかりが強調されることになってしまったことの原因の解明にもつながる。それゆえ、この章の議論はアルチュセールが踏み出した「はじまり」から、さらなる先への展開であり、アルチュセールが踏みとどまり、進むことができなかった領野への前進である。

精神分析において身体の問題を考えるならば、欲動の問題を経由せざるを得ない。われわれの身体は内部で欲動が蠢くりビドー化された身体であるのだ。これを確認することで、鏡像段階における同一化の機制がさらに明確になる。ここで重要な働きをするのが欲動の対象である対象 a である。身体がシニフィアン化されるとき、同時に身体が性愛化され、欲動の運動が活性化し、主体は〈もの〉へと回帰する、すなわち享樂する。イデオロギー的行為を反復する主体はまさに享樂していると言えるのだが、これと類似した症状が反復強迫である。そのとき死の欲動の問題が浮上する。しかし享樂は主体が消失する事態であるゆえ、元来主体には不可能であるが、この不可能性を解消するのが幻想である。幻想とはまさにイデオロギーそのものであり、幻想が産み出されることによって主体とその世界が立ち現れる。

ここで注目すべきは、精神分析的对象である不安である。不安は哲学においても頻繁にとりあげられてきた現象であるが、不安の中にたびたび現れ出るのが、声（呼びかけ）とまなざしである。これらはまさに精神分析が対象 a として掲げてきたものである。そして興味深いのは、不安とカントにおける道德法則における尊敬には共通点があることである。これを確認した上で、さらにまなざしの機能を見るために、道德的主体をつくるために開発されたパノプティコンに関するフーコーの議論を通過する。さらに声に関する考察を通して、精神分析における対象 a としての声が、ハイデガーの議論において示された良心の声と実に類似した特性を有しており、これが倫理的主体を構成することを認めることができる。ここに、イデオロギーに呼びかけられ、それに応えることによってイデオロギー的主体へと変貌を遂げるわれわれの姿が現われ出ている。

徹頭徹尾問題になるのは、欲動なのであり、欲動とは精神的なものと身体的なものとの境

界概念である。だから、身体なのであり、身体こそ、欲動に直接触れることができる場なのだ。身体のシニフィアン化によって欲動の運動が活性化され、身体の反復運動を引き起こし、あるいは欲望を駆動させるのだ。

そして最後に問題になるのは、或るイデオロギーとの出会いはたしかに偶然であり、偶然出会ってしまったイデオロギーに沿った行為を反復することでイデオロギー的主体へと生成を遂げるが、しかし果たしてこの出会いは偶然と言えるのかどうか、である。

第四章は、アルチュセールの国家論について考察する。アルチュセールは「国家のイデオロギー装置」という概念を創出することで、マルクス主義国家論に新たな地平を切り拓いたが、それはあくまでもマルクス主義の基本原則を前提にしていることを確認せねばならない。正しい構えなしでは社会変革の真の「はじまり」はあり得ないからである。国家とは支配階級の道具である、古色蒼然としたマルクス＝レーニン主義の基本的な国家観でありつつも、しかし現代にいたってもなお、この国家観は有効であることを見失ってはならない。

法は社会秩序の維持には不可欠なものであるが、しかし法は守られねば機能しない。そこで必要になるのが、国家の抑圧（暴力）装置であるが、しかし抑圧装置に頼っているのみではあまりにも効率が悪い。そのとき注目すべきなのがイデオロギーの存在である。さらに、社会構成体は日々生産と再生産を続けねばみずからを維持させることができないが、ここでもまたイデオロギーが重要な役割を果たす。生産活動は人々が労働に従事し得る能力を身につけていなければ不可能であり、こうした能力を身につけさせるのがイデオロギー装置なのである。そして資本主義体制が確立・維持されるためには、自由と平等というイデオロギーが自明のものとして人々に共有されていなければならないが、それを実現するのが国家のイデオロギー装置である。まさに各種のイデオロギー装置は自由などの国家イデオロギーによって貫かれ、国家のもとにある。しかし問題なのは、たしかにわれわれはみな自由であるとされており、誰もがそれを疑わないが、言うまでもなく実際は自由であるとはいい難い。この自由のパラドックスに関してはアルチュセールも気づいてはいたが、なにゆえこうした事態が生じてしまうのかについては究明しなかった。それゆえ、アルチュセールに代わり、この問題を精神分析を通して分析することを試みる。

第五章では、マルクス主義において古くからある問題、理論と実践について考察する。社会変革を標榜するなら、人々の意識を根底から変えるだけの力を持った理論が必要になる。そこで問題になるのがまたしてもイデオロギーである。いまあるイデオロギーが人々の視界を遮り、未来への跳躍を阻んでいるからである。こうした事態を突き破っていくのが、科学による理論革命である。ひとの認識はつねに科学によって切り拓かれていくのであり、それを促進していくのが哲学である。しかし問題なのは、そうたやすくひとはいま自分が有するイデオロギーから逃れられないということであるが、それにはしかるべき理由がある。だが、アルチュセールはその理由をつきとめることができなかった。それゆえアルチュセールのイデオロギー論はイデオロギーの閉鎖性と強靱さばかりを強調する結果となり、イデオロギーからの離脱の契機をつかむことを困難にしてしまった。したがって、ここでもまたア

ルチュセールに代わり、イデオロギーの執拗さの理由を精神分析に依拠しながら解明していくことを試みるが、しかし、これによってイデオロギーからの離脱は難しいことが一層確認されてしまう。だが、そのとき、期せずしてアルチュセールのイデオロギー論に、アルチュセール自身も気づかなかった、突破口を見出すことができるのだ。

第六章では、まさにアルチュセールのマルクス主義活動家としての「はじまり」に遡り、その可能性を追求する。その「はじまり」は第二次大戦中の捕虜時代にあり、大戦終結直後、解放された収容所には「コミュニー的なもの」が実現されていた。アルチュセールはそこから共産主義に関する最初のインスピレーションを得たのである。しかし、これは何ら特異なことではなく、マルクス＝エンゲルス以降、実在したコミュニーの一つであるバリ・コミュニーはつねに未来社会の参照軸となってきた。また、これまで様々な時代、地域で大衆叛乱が生起するとき、そこには必ずコミュニー的なものが産み出されてきた。そしていま、世界各地で民衆による叛乱が巻き起こり、そこにもまた再びコミュニー的なものが出現しているのだ。社会変革運動にはつねにコミュニー的なものが内蔵され、コミュニー的なものは人々を惹きつける。なぜか。コミュニー的なものは祝祭的であり、祝祭がひとを魅惑するからである。それでは、なぜ、祝祭は魅力的なのか。これを解明するためにバタイユの思想を経由する。これを受けて、コミュニー的なものの現代的な可能性について模索していくが、ここで注目すべきは、近年世界各地で巻き起こる民衆闘争である。そのどれもがコミュニー的なものを内包しながら展開されているのだ。われわれの前に出現したこの事態を契機にして、コミュニー的なものの現代的な可能性と社会変革の展望について、ネグリ＝ハートの現状分析を踏まえながら考察していく。

もちろんこうした考察は、アルチュセールがこの世を去った後の現代に視点をおくゆえ、アルチュセールにはなし得なかったことではあるが、アルチュセールの理論全体に漂うトーンとは異なる傾向を持つことではじめて可能となるものである。それは現代に生きる民衆たちに対する圧倒的な信頼とその存在の肯定である。

このように本稿の要となっている議論は、アルチュセールがマルクス主義の刷新を図るために行ったマルクスの理論とフロイトの理論との接合、とりわけ、社会思想の画期となったアルチュセールのイデオロギー論を中心に据えた精神分析的展開の再検討と深化である。繰り返しになるが、アルチュセールがその端緒を開くことのみに終始した理論的地平から、さらにこれを大胆にその先へと展開することである。そこには、アルチュセール自身が見ることができなかった可能性に満ちた大地が広がっていることだろう。この未曾有の領野を切り拓くことに挑戦することが、本稿の目的である。